

陸羯南の紋別行

「寒帆餘影」を資料として

稲葉克夫

一

陸羯南が自叙伝風に自分を語つたのは「羯南文録」に
採録された漢詩集「寒帆餘影」の序においてである。も
つとも私はこの詩集の製作年代やどういふ形でまとめら
れたものであるかなどの研究はしていないし、またここ
で我がのべているのは、明治十三年九月に北海道有珠郡
の紋別(麓)製糖所へ赴任する二十四才までの恵まれざ
る遍歴の概略である。

したがって「寒帆餘影」を資料として陸羯南の伝記的
研究をすることは限られた意味でのそれではない。し
かし限定的意味においても「寒帆餘影」は確かに羯南の
シュトルーム・ウント・ドラング時代を知る唯一の資料
であり、私は今回、これに基づいて羯南の紋別行を考察
してみた。

二

羯南は明治十二年、司法省法学校を賄征伐事件で退学

して以来、東京での確固に破れ、敗殘の身を津輕の生家
に寄せるのであるが、ここも、今也伯氏家貧、慈父餘哀
の狀態であり、慧いの地ではなかつた。かつての「英雄果
何物」といふ彼の壯志はゆきつまり、その存在は家庭的
紛議の種となる。この時の心情は第一漢詩集「咳聲餘韻
」により具體的にのべられている。

羯南は帰郷してしばらく時勢に身を投じて東興義塾
ルーフの自由民権運動に参加したり、「青森新聞」での
言論活動によってその新知識ぶりを発揮するが、所詮そ
れも彼の雄心の前には空しいものだった。このあと再挙
を期して上京したが、その巨論も失敗し、ただフラン
ス語の文能を認められて紋鑿製糖所の技術書翻訳係にあ
りついただけであった。

この時、いかなる経緯でこの職についたかは不明であ
るが「寒帆餘影」では「況不能自保、而欲濟人、不太過
乎、遂有北航之志、郷友憐余者、亦來勸之」といってい
る。つまりここには経済的自立のためには都落ちを止む
なしという気分になっている時に、故郷の友人もそれを

勤めたとある。これは東京での再筆の夢に破れ、津軽へ帰つて来ていた羯南に法学校時代の友人が恩師が紋筆製糖所の情報を伝えて来たので羯南自身意が動いていたところへ、さらに、この頃内務省勸業局が棉糖について各種の会合を積極的に行き、寒地甜菜栽培の指導も行なつていたので、その辺りからの情報でも知つた津軽の旧友が勧めに来たということだろう。

紋別行きを決定したのが故郷においてであつたといふことは、今茲仲秋、遂決意辞郷の句で分る。この際、節氣を羯南を動かすだけの人間、しかも官界の情報でもつて羯南の北行を勧めるのは医科大生の伊東重男たりであるか。と、八月は折良く夏休み時期でもある。

「寒風餘影序」において、それまでの自分の生き方を「大空」の修身奇家の論理から反省したとあるが、これは多分に自分の心の動搖を隠す艱峻（こづね）の表現であると思う。それにしても口舌の徒であることを恥じ、經濟的独立を第一義とする人生觀を強く打ち出したのは、羯南の青春の終了宣言であり、一種の転向である。この辺の心境は札幌農学校へ戻り、一種の精神主義グループとは違ふ。この際、虚理空談未足争、というのには、確かに一面の意理であるが、果して羯南が心底をういう気分になつてゐたか、また自分自身を納得させるためのタテマ工論なのか問題である。ともあれその序で賦した秋風の九月、人が故郷へ帰り、望郷の思ひにかられる時に逆に海峽を

越える心の切なさは眞実の心情だろう。

三

羯南が渡道した頃の青函航路は三菱会社の浪華丸である。運賃は上等客が二円三十枚、中等一円五十枚、並等一円で運航は隔日だつた。浪華丸のトン数は不明だが、それまで青函航路を運航していた北海道拓殖の紫雲船弘明丸は二〇九トン、長さ百五十五尺、巾二十尺、四十一ネル形の船だつた。また同じくこの航路に就航していた鶴龍丸もスクーネル形で三七四トン、船身長は四十二尺だつた。この頃の海上運送の主力はまだ和船の舟敷船や風帆船だつた。なお、青函航路は赤字で、三菱会社が運営する一年間の赤字六千四百四十九円二十一銭の三十分の一を明治十二年から十四年まで政府が補助してゐた。

ともかく、「青森新聞」で單獨事件をおこし、東京でも思うように行かなかつた羯南がこの浪華丸に身をゆだねて新天地、北海道へ渡つたのは明治十三年の秋、九月十五日のことだつた。

その頃の北海道の幹線は、札幌創成橋より室蘭港に至り、室蘭港より森村へは海上航路で、森より函館橋本場までは馬車によるというコースである。

函館から森までは明治五年に馬車が開通してゐたが、七年には業務不振で中止してゐた。しかし、羯南が紋別

へ赴任する明治十三年に、開拓使のテコ入れで再会することになり、道路も大巾に改良された。利用者もいちじろしく増えていた。

馬車は一、六、四、九の日の午前七時、函館を発し、七飯を通り、十一時に中間の峠下村につき、二時間休憩、午後一時に出発して大沼、小沼のほとりを走り、五時森内に到着した。料金は一円四十三匁と毛である。九月十三日函館に上陸した羯南は、翌十六日この馬車にゆられて北上することになる。

明治二年、伊達直理藩士移住のため下地検分に田村顕亮が行った当時は、森から内浦湾沿いに長万部まで歩き、長万部から埴田まで水行するのだが、開拓使時代になって明治五年七月、米人「恵土和留布伊留度」をして森村に神像を奉かしめた。その長さ八百五十尺で二万円の費を要した。

船は毎月一、六、三、八の日の午前十時に室蘭へ出航した。開拓使は始め海上二十五里半の運賃を上等二円五十匁、中等二円、下等七十五匁と決めたが、一般人の多くはそれを利用しないで小船で通行した。それが極めて危険だったので明治八年三月、開拓使は一挙に値下げして並等五十匁、等外二十五匁とした。羯南は森で一日過ぎし、恐らく九月十八日の便で室蘭へ出発したろう。「亭」に「船入函港 実九月十五日也 去港数日 將入室蘭港」と詠んだのはこのことを指すと思われる。

室蘭は、明治二年の田村顕亮の報告によれば土人密入戸が馬千頭を収めていたとある。港灣として盛頓湾は幕府時代より着目され、利用もされていたが、明治二年七月、室蘭港に灯台がたつぎ、入港の船舶より等灯銭をとり、室蘭海關所は有珠、蛇田二郡を管轄し、船政時も設置されていた。九年には浮標も設けられ、外国貿易も許可された。このように室蘭は道南の拠点として目覚ましく発展し、中心部漸となり、明治十三年、この地三郎を兼ねた郡役所には初代郡長として伊達直理藩士の田村顕亮が任命されていた。

室蘭へ上陸した羯南は紋別まで馬車を駆って行った。ある。「也投荒地事遠征 風物寥寥瞻自驚 狄馬壯強奔不駐 一鞭飛過十餘程。の詩は函館と森間の駒馬車のことではなく、室蘭・紋別間のことである。室蘭から紋別へは疾風の道であるから、ついで」立馬處豪看巨海」の詩が生まれるのである。

四

ところで、このようにしていよいよ到着した紋別へ筆は羯南の目に込のように映じたろうか。「寒帆餘影」の紋別秋景を詠むと、当時の紋別の地はいかにも人煙稀な絶境のようにうたわれている。確かに羯南は十万石の城下町弘前に生まれ、仙台・東京などの大都會ぐらしも長かった目には一見そのように見えたか右知れない。

とくに郡落ちの心情からみれば特にそのように感じ、言いたくなるのも無理なからう。しかし、当時この札幌の紋別を覆っていたのは、札幌に劣らぬ精神的豊かさとも明るい未来図ではなかつたらうか。

当時、町の人口は約三千人、アイヌは六百人ではじめ亶理藩士以外の和人は百人に充てなかつた。したがってこの地は伊達亶理藩の再建だった。移住に伴う藩士たちの生活条件は厳しかったが、十代代に入ると近代農法による小麦や大豆の栽培品種が順調に育ち、札幌農学校の専主たちが意欲的に農場経営にいそしみ、官立の製糖所や亶理風の事務所を中心に広い敷地をほこり、工場内の三十余の大鉄構は白煙をあげて活動していた。事務所の長には宮更宿舎が当時としてはモダンな建築として十余戸立ち並んでいた。長流川の川口を中心とした港も砲々かき、この地一帯は北海道唯一の農沃地賑わいを呈していた。

以上は自由民権家で伊豆から、晩成社を率いて北海道へ渡り、帯広の創始者となつた依田勉三が明治十四年八月に紋別を訪れて書いた「北海道紀行」による。これが十年前の明治三年四月、亡國の思いで室蘭の雪の上に泣き崩れた亶理藩士たちの十年にわたる営為の成果であつた。

したがって紋別は文化的水準も高く、すでに明治五年盛振園では最も早い紋別小學校が設置され、蘭内・稚府・

長流の分校をもつていた。しかも私立学校として「帰読書屋」と「耕餘学舎」が明治十三年に設置されている。

この私立学校は設立時期と亶立製糖所の操業と時期が一致するということは製糖所の存在が紋別の町民に大きな文化的刺激を与えたのだと思われる。紋別に製糖所が設置された理由の一つは亶理藩士の威徳ある労働力が見込まれたのであり、初め五十人、多い時には百名近く雇われており、甜菜栽培に約三百戸参加していた。

紋筆製糖所は明治十一年内務省勧業局長久松正義がパリ万国博で機械制甜菜工業を視察して帰国したことから出発する。翌十二年、フランスから機械を導入し、内務省の所管事業とし、同十二月各種の利点から紋筆設置と決定し、十三年三月に起工し、十二月下旬に完成した。工場は六〇〇坪の敷地に三階建、付属の建物をあわせると七〇〇坪であった。ここは当時のわが国における機械工業としては唯一のものであった。

しかし十三年十二月二十八日の地震の際、機械取付の失敗をおかし、その後台故障が相つぎ、十四年四月に農商務省工務局に所管が移されて生産が開始されたが、フランス船沈没の下運や技術の未熟のため食用にならぬ品質しか生産できなかった。それで人事を一新し、工場設置目的を試作実験に変えたのである。福蘭が所長山田重吉とともに紋別を去るのはこの人事一新の際である。

ら。

教養糧所は現任写真等の資料で向うよりほかないが、事務所は正面玄関の上がバルコニーになって飛び出し、フランスやベルギーなどにみられる直線の勝つた長形の民権学的外説を呈しており、屋上に田の文がひるがえり、大煙突から黒い煙が吐き出されている風景は、明治十三年としてはまさに本邦唯一の大工場の偉容を示すものであった。現在、文化財として残っている三尾藩士の移住感と対比してゐる時に、いかにこの製糖所が現地に大きな刺激を与えたかは想像をほるかにこえることであらう。

五

紋別時代の羯南の心境やその特質を知るには、偶感と選する一編が最も代表的である。

晒督徒過廿四秋（晒督は流し目に見ること）

疎狂淫俗客荒阪（荒阪は荒れたる国ノ果て、つまり北海道紋別のこと）

海道紋別のこと

風雲寂寥池龍志（龍も時を得ず池に潜むよりほかない）

山海隔離龍鶴憂（龍鶴は白居易の詩、誰識相念心 鶴

鷹翼、イー、講上鷹は勇ましく飛び

回るの意、鮫照 東武吟、昔如講上

鷹今似檻中猿）

戴白在堂今何状（戴白は手寄り、在朝の権臣のこと）

行朱尚世希若情（行朱は朱色の印のひもを身に帯ぶ

後漢書官者伝高冠長劍行朱 懷金者

布滿宮闈、闈は後宮のこと、嚮はこ

ちから）

叔頃未得計得養（師はおが、改訂は次山）

洛隄殊方猶壯遊（殊方は異域、北邊道の意）

当時の羯南の心は第一に過さし廿四年の生き方への悔い、第二は紋別に漂流された意識、第三はアンペンヨンを発揮しその無念さ、第四は現在の権力者への不満、第五は弘前の老父へ孝養尽くせぬこと、第六はこのようになったてなお屈せず、紋別や室蘭で壮遊する情の張り心である。

紋別時代の羯南の愛読書は「六韜三略」であった。

春雨青樓夢 秋風白屋魂 男兒不空 韜略月中繙」と吟

じているが、この「六韜三略」の思想も、かつて幼少に

愛読した「山鹿語類」と同じく羯南の思想形成の大きな

要素とみられる。

「六韜三略」はいうまでもなく周の呂望、つまり大公

望の作に仮託された兵術の書である。わが国への渡来は

宇多朝以前であり、広く読まれた一般教養の書である。

しかし明治初年の啓蒙期にヨーロッパの自然法思想を基礎に合理的なフランス法学を学んだ羯南が、片手でフランス製糖技術書の原点を翻訳し、片手に中国古来の兵術書「韜略」を味読する姿はまさに東洋の道徳、西洋の技

術そのものである。

羯南の國民主義の中核に徳治主義があげられるが、周の文王の問いと太公望の教導の書である「六韜」に共感する気持には、すでに二十年代の原型が存在していたのである。「六韜」の文韜篇、守土第一に、土を守るには如何にと国土防衛の秘策を尋ねたのに対し、まず、其親を疏んずるなかれ」と親族間の和合をとく。これは中国の宗法社会にからむものであるが、家産の紛争に身をまさせられて苦慮する羯南には身にしみる教えであった。また、富まざれば以て仁を為すことなし」とかく金銭を輕視し、苟ちな儒教倫理から解脫されるよりどころだろうし、この時期にさかんに通を得ること、定職をもつことと強調している理論づけともなつたろう。

「寒飢餘影」では「大学」の修身各家論から経済重視に傾いたと書いているが、「韜略」からの影響がより直接と起る。羯南は儒教的教養については、漢詩集の第一集である「岐聲餘龍」に、明治十二年頃の作と思われる「不如意行」の長詩を戴せ、悔信迂陋漢儒説 椅草採句 殆誤身」と否定的である。

もちろん、これらのことは、この時期に羯南が動搖していたのだという説明もあるが、そうであればこそ自分の身の振り方を、より具体的に、戦国的場の上にとらえ、戦術、戦術的発想によつたといえる。

条約改正問題さかんなりし頃、狼吞より蚕食の恐ろし

さを強調するが、この他国侵略方法は「文伐」に属し、十二方法が詳細にのべられている。その他、「三略」が強調する戦うには必ず義を以てするという姿勢は羯南の終生変わらざるものであった。義を重んずることは「三略」の「使義士不以財 攻暴者不為不仁者死」という人材獲得論にもいわれ、羯南も共鳴していたろう。「三略」も太公望の書といわれるが、實際ははるか後代の作である。そして一見、自然を尊ぶ老子的思想の流れの中に、規、美、批判の鋭い鋒先が隠されている。冒頭の「夫主將之法務權、英雄之心、賞祿有功、通志於教、故手教同好、靡不成、与衆同惡、靡不傾、治国安家、得人也、亡國破家、失人也。含氣之類、咸服其志」という一節など不満うつほつたる羯南をして心から首肯させたのであろう。

また弱國だった日本が帝國主義の國際社会に独立を確保する精神的よりどころに、「軍識曰 柔能制剛 弱能制強 柔者徳也 剛者賊也」という弱者礼賢の思想も大いに与つて力あつたことである。

羯南の紋列時代に忘れてならない今一つのことば、所長山田虎吉との出会いである。山田の思想については直接知る手がかりを持たないが、山田と一緒にフランス留学をした古市公威や沖野忠雄の國家主義思想はよく知られている。三人とも富國強兵の土木工学家でとくに古市は山縣有朋のブレーンであり、大陸進出のための土木設計の功績で爵位を受けることとなる。山田も全国各地で

鉄道敷設や土木事業、手拓事業を行なったが朝鮮の東釜、家義線の建設は有名であり、フランス留学中に松方正義に認められたのであり、明治十四年に翻訳出版した「甜菜製糖新書」の序文は松方が茶耕園主人正義として書いていた。羯南も松方正義には好意を待ち続けており、明治二十九年の松隈内閣にも協力し、松方の品寿の祝いは「賀松方伯と十」の頌詞を捧げている。

ともあれ、雄心空しく破れ憂さを酒にまぎらし、果ては頭を強く垂れて苦悶を噛みしめている羯南を病人とみなした隣人になり「不解英雄」といい、男子空しく死なすと同下に六韜三略を読む感慨の羯南には、北辺で工業技術書を翻訳する生活は耐えられなかつた。結局、札幌へ馬を飛ばして品川弥二郎を知り、明治十四年五月僅か八か月にして紋別を去ることになった。

その頃、函館―東京間に就航していたのは北海道千百トンで、この蒸気船は当時の最新鋭船であつた。北海道丸はスノーネル型で長さ二百二十六尺、巾三十二尺、マスト三本、二百五十三馬力でフランスのホルテックス社製造、運賃は上等の日本人は十七円、外国人三十円、並等は日本人五円だつた。

かくて紋別の地で不本意のまま、起望帝京暮雲白、大平命酒又登樓の生活をくり返した羯南が東京の土を再び踏む日も近く、波濤をのりこえ五月の海を南下する北海道丸の旅は、明治の大政論家陸羯南が誕生する船旅とな

なつたのである。

- (参考文献)「北海道志」(明門版權届出、明治廿五年五月出版、発行者北海道同盟著読館、館長村尾元長)。
「伊達町史」。「新編伊達町史」。日本科学技術史大系(1)・(3)・現代日本産業発達史(18)。図説日本産業大系(6)。日本産業史大系(北海道地方篇)。日本産業文化変遷史。羯南文録。兵法六韜三略(安藤亮著)

終